

## 第 16 回根研究集会に参加して

村中 聡

筑波大学大学院農学研究科

今回で 16 回を数えることとなった根研究集会が、2002 年 6 月 8 日に東京都文京区 日本女子大学 百年会館で開催されました。この百年会館は日本女子大学開学 100 年を記念して作られた美しい建物で、近代設備と女子大の華やかな雰囲気に圧倒される感じがいたしました。私は個人的な興味から 4 年ほど前から根の研究會に所属しておりましたが、根を研究対象として扱ってはおりませんでした。しかし、最近ようやく耐湿性と根の関係についての研究を始めることができ、今回初めて根の研究集会への参加させていただきました。

まず、この研究集会に参加して驚いたことは、話題の幅が広く、同じ根に対しても様々な角度、視点からの研究が行われていたことでした。今回の集会幹事である日本女子大の今市先生も懇親会の席で「マクロからミクロまで」という言葉を用いて表現されておりましたが、学術賞受賞者の講演題名をみるだけでも、根系形態からトランスポーターの機能解析、画像解析から遺伝解析までと各分野の方々が受賞されていることは、このことを如実に表していると思います。

特に心に残った発表は、多賀氏らによる「衰退著しいシダレザクラの断根処理による樹勢回復」でした。日本の庭師の間では古くから断根処理が行われてきたのに対して、樹木医の間では樹勢の弱った樹木の根を切ることがタブーとされていることに疑問をもち、シダレザクラに対する断根処理の効果を検証したものでした。多賀氏らは発表中に何度か「これは研究ではない」、「実験ではない」という言葉が使われておりましたが、疑問をもち、仮説を立て、処理を行い、経緯や効果を評価する、という点で私にはひとつの素晴らしい研究である感じられました。以前から茶樹の根系については実際の現場と深く結びついた形で研究がおこなわれ、報告がされておりましたが、今回の多賀氏のシダレザクラの研究に続き、今後はその他の作物や樹木についても実際の現場からの報告や研究が活発におこなわれるものと思います。既存の他の学会でも学際的領域研究や産学官連携研究が求められていますが、根の研究會でも実際の現場との広い情報交換が行われ、研究協力等の活動に結びつくことを期待します。

また、拓殖大学の仁木先生が示された、根の湛水ストレスにおいて水と低酸素ストレスを切り離すという発想には、耐湿性の研究を始めて以来、低酸素ストレスには水ありきといった考えに凝り固まっていた頭を揺さぶられる思いがしました。同一の研究テーマに対して、様々な研究分野の異なった視点からの研究を聞ける場はなかなか無く、根研究集会ならではの経験であったと思います。つくづく、これからも根研究集会に参加して、自由な発想を生み出すために頭を柔らかくしておく必要がある、と感じさせられました。

一方、このような広い研究領域での情報交換が可能である反面、私のような根の研究初心者にとっては、対象とする植物種や研究手法が大きく異なった場合、研究内容を理解することが難しいと感じることもありました。今回の研究集会では、参加者が 80 人程度と前回から比べ大幅に増加し、発表数も非常に多かったことも影響し、発表 13 分、質疑応答 2 分という設定では、やや質疑応答の時間が限られていたと感じられました。「様々な研究分野の研究者および技術者が集まる」という根の研究會の特徴を活かすためにも、発表者と気軽に意見のやり取りができることは重要であると思います。参加人数は今後も研究會の充実と比例して増加すると考えられますので、例えばテーマ別に合同の質疑応答の時間を設定する、休憩時間に場所を割り当てて質問の場を設ける等、根研究集会ならではの工夫する必要性を感じました。

今回の根研究集会では非常に熱気あふれた研究意欲や、分野は違えど根に関する研究を行っているといった一体感を感じることができました。研究集会のあり方も参加人数や講演数の増加に伴って変化していくものと思いますが、ざっくばらんに情報を交換し、お互いを刺激しあうことが出来る、この雰囲気を根研究集会の特徴として大切にしていきたいと感じました。今後の根の研究會の発展を心より願っております。